

平成二十四年十月十一日（木）晴

いぢめが原因と見らる、生徒の自殺全国的に廣がりを見す。生徒の自殺發覺するや、いぢめたると目せらる、側は、いぢめに非ず、單なる擲揄、喧嘩に過ぎずと主張し、學校側はいぢめと自殺との因果關係證明不可能を理由に、他の個人的惱みの可能性を示唆す。「死人に口なし」真相は遂に明らかとならず。

問題に思ふは、いぢめ内容の激變なり。昔よりいぢめの存在は言ふに及ばざるも、最近の例へば、盗み、萬引き、更には實家の通帳より現金引出しを強要、果ては自殺へ追ひ込むなど、曾ては全く考への外にあり、その世代に育ちたる校長、擔任の先生の想像を絶するが故に、屢々對應を誤るに至るが如し。

この斷絶は何處より來れるや。人は多く教育にその根源を見んとす。されど、世は擧げて弱者への配慮を要求し、一度事故發生せば、校長は「生命の大切さを教ふ」と強調するを常とするなど、少くとも「人權尊重」の教育往時に比ぶれば寧ろ強化こそせらるれ。觀ずるに、我が日本人の民度低下せるにあらずや。最早「極く少數の例外」と片附くる能はず、幼児期及び青年期の問題として考ふるの要あり。

幼児期の環境として、戦前の三世代同居より、核家族化の行き渡る中、まづ慈愛を受くる人數の減少ありて、慈悲の心育ち難し。是、歐米と變らずと言ふも、彼の地にては、永年キリスト教など文化的の補助手段を通じ、幼児の情操を育てをり。然るに我が國にては其れ等の準備なきまま、且つ戦災による住宅難、法律による家族制度の廢止など、謂はば制度の先行強制せられ、文化的成熟の後の放置あり。かくては我が國獨特の育児の傳承も行はれず、若き両親は作す術もなく幼児期を空費す。家庭内の幼児虐待も増加の傾向にあり、最近「羨のため」と稱して十一歳の我が子をゴルフクラブにて打擲、死に至らしむるあるなど、これまた曾ては考への外にありけり。

青年期にありては、人押並べて自我に目覺むると共に、生意氣且つ腕っ節も人一倍強うなり、周圍扱ひに手を焼くに至る。かかる時に人徳人に優れたる師、有能の先輩の現はるれば、その教化忽ちに顯らかに、篤實の好青年とならむ。是中等教育の極意にして、明治政府之を理解して中等學校の整備に當りては、教師の育成に努め、昭和初期ほぼその完成を見る。然るに前の大戦に敗る、や、連合國夙に我が中等教育の充實を知り、教育使節團をして眞つ先に中學校の二分割並びに下級中學の義務教育化を勸告せしむ。かくて學校數激増し、漸く充足せる教員、忽ちに不足す。

戦後の變革固より評價すべき點尠からずと雖も、右の二件は我が國文化の崩潰への契機となりたるを疑はず。「文化の創造」と大いに喧傳せらる、も、その前提に傳承のあるを忘る。昨年東日本大震災に際し、かかる折には殆ど世界共通なる、打ち壊し、掠奪の類全く發生を見ず、海外より日本の文化に賞贊の聲上りたるも、次世代に此の文化傳はらざれば、是も掉尾の美談に終らむ。